



菅原由美、『オランダ植民地体制下ジャワにおける宗教運動——写本に見る 19 世紀インドネシアのイスラーム潮流』大阪大学出版会、2013、viii+336p.

本書は、2002 年に東京外国語大学に提出された博士論文「19 世紀中部ジャワ宗教運動研究——アフマッド・リファイ運動をめぐる言説」に加筆訂正を行ったものである。論文は 2003 年に第 2 回アジア太平洋研究賞を受賞している。

本書が対象とするのは、1840～50 年代に中部ジャワ北海岸のプカロンガン州カリサラック村を拠点として起こったアフマッド・リファイ (Ahmad Rifai) の宗教運動 (以下、リファイ運動) である。19 世紀中葉は東南アジアの植民地後期にあたり、強制栽培制度が展開したジャワでは、伝統的現地人首長の権力が解体して植民地行政に取り込まれ、植民地権力の支配と貨幣経済が農村社会にまで浸透する一方、ハッジ (メッカ巡礼者) とプサントレン (イスラーム寄宿塾) が増加し、農村社会のイスラーム化が進展し、イスラーム指導者 (ウラマー) の中には民衆に支配体制への対抗の言説を提供する者も現れた。

従来、この時期の歴史理解の枠組みは、植民地政庁の史料に基づいてきたが、本書の研究は、これまで欠けていた宗教指導者と現地人首長側の史料をも用いた多角的な検討を行うことで、ジャワにおけるイスラーム史ひいては後期植民地期社会の研究に新しい材料を提供した点で画期的である。

本書は、序章と終章を含む 7 章から成り、巻末に付録として 1846 年プカロンガン州県別ハッジ名簿とリファイ著書リストを付し、さらに、資料編としてリファイの最初期の著書である『シャリフル・イマン』 (*Sharīḥ al-īmān*) のジャワ語ローマ字翻字テキスト全文を掲載する。

まず序章では、農民反乱を分析したサルトノ・カルトディルジョの先駆的な研究 (とくに Sartono [1966; 1973]) を主たる先行研究として問題の所在を示す。著者は、サルトノの研究において現地

人首長の視点と宗教指導者の思想の分析が欠如していることを指摘したうえで、本書の課題を、19 世紀ジャワ社会の状況という文脈のなかで、リファイ運動を事例として取り上げ、運動に関与したオランダ政庁、現地人官吏・宗教役人、宗教指導者の 3 者の見解を彼ら自身の声で語らせることに定める。

第 1 章では、現地の社会状況を経済、政治、宗教の 3 面から叙述し、リファイ運動の背景を明らかにする。経済面ではサトウキビ栽培の導入によって現地人首長を介在しない「自由労働者」の賃金雇用が拡大し、政治面では現地人首長 (とくに最上位のプパティ) の権威が失墜する一方、宗教役人パングル (インドネシア語ではブンフル) が植民地官吏としてムスリム住民の対応にあたった。宗教面ではハッジとプサントレンの数が増加した。パングルはウラマーでもあるため、プリアイと民衆の間であって両義的な位置にあったが、19 世紀中葉にはプリアイの一員であったと著者は判断する。

第 2 章では、リファイの経歴と宗教運動の経緯を扱う。1786 年にパングルの家系に生まれたリファイは長じてイスラーム教師となり、メッカに渡って学んだあと、1839 年にカリサラック村にプサントレンを開き、20 年間にわたって著述と宣教活動を続けた。59 年に総督の命令でアンボン島に追放され、76 年頃に死去した。なお、その後もリファイの弟子達は活動を続け、リファイ運動は現在に至っている。

本論が始まる第 3 章では、オランダ政庁によるリファイの活動に対する認識と対応を分析する。著者は、オランダ政庁が現地人首長からリファイを危険とする報告を何度も受けながら、1859 年になってようやくリファイを「狂信的ムスリム」で「国家の治安を乱す者」とみなして追放を決定したのは、1857 年のインド反乱を受けて潜在的な宗教的危険分子の排除という政治的判断が下されたためと結論づける。

第 4 章では、リファイの死去 8 年後に刊行されたジャワ語の文学作品『リパンギ物語』 (書名はリファイのジャワ語読み) を分析し、無知で狂信的な異端のハッジというリファイのイメージを現地

人首長層が作り上げたことを明らかにする。『リパンギ物語』は伝統的な韻律形式で書かれたジャワ語の作品で、刊行時には18世紀頃に書かれた有名なジャワ語宮廷文学『チャボレックの書』の後編として出版された。ジャワの神秘主義を説く異端のハッジを宗教役人が論破するという『チャボレックの書』の物語の枠組みを模倣して、『リパンギ物語』は、リファイの蒙昧と無能さを宗教役人がブパティと協力して暴き出すという内容である。植民地政庁によるリファイの逮捕命令で幕を閉じる点に、政庁の権威に依存する当時の現出人首長層の立場が如実に示されている。

第5章では、リファイの主要著書の概要とイスラーム学における位置づけを明らかにする。50点を超える著書は、イスラーム学の基本である神学、法学、神秘主義の3分野をまとめた教本（キターブ）と日常生活にかかわるテーマ別の教本に分けられる。いずれもアラビア語文献の引用とジャワ語による翻訳及び解説の組み合わせという形式をとる。ジャワの農民にとって理解し暗唱しやすく、ジャワ語の部分は平易な韻文形式で書かれている点が特徴的である（表記はペゴンと呼ばれるアラビア文字）。引用された文献には中東の古典文献に加えて東南アジア出身のウラマーによる文献も含まれている。先行研究からリファイの思想はスンナ派の学派に属する正統的なものであったことが明らかにされている。しかし、異教徒であるオランダ政庁に仕えるウラマーを「不義を犯しているウラマー」として痛烈に批判し、上位者への跪拝、飲酒、賭事、ガムランやワヤンなどの伝統娯楽、共食儀礼といったジャワの伝統的価値を否定することで、植民地行政に取り込まれたバングルやジャワ文化を体現する現出人首長にとって、自らの権威に対する挑戦と受け止められたのである。

終章では、論点を総括する。リファイの出現は、19世紀半ばのジャワにおいてアラビア語文献の豊富な知識に基づいて「ジャワ人のための宗教書を書く人物が登場する段階に入っていた」ことを示している。彼によって正当性を脅かされた現出人首長側は『チャボレックの書』を参照することで、「リファイとの戦いを、ジャワで繰り返されてきたとされるイスラーム正統派対異端派の戦いに置き

換え、政治面だけでなく、宗教面においても、自分の立場を擁護し」、ハッジによってもたらされた新たな「イスラーム化の波」に対抗しようとした。他方、オランダ政庁にとって、リファイを国家の治安を乱す狂信的ムスリムと規定することは、インド大反乱の勃発という「国際政治状況の変化によって必要とされ、言説化されていった」。結論として、リファイ運動は、「前世紀から徐々に蓄積され19世紀において加速したイスラーム化の新たな潮流が植民地再編過程に衝突した結果生じた運動」だったのである。

上に見たように、本書の最大の意義は、一つの宗教運動をオランダ政庁・現出人首長層・宗教指導者の三つの視点から多角的に分析し、リファイを「狂信的異端」というレッテルから解放したことであり、各章の論旨も説得的である。また、ジャワ語史料の重要性を再認識させた点は重要で、本文中で原文テキストと的確な和訳が併記されており、著者の論点を確認することができる。しかしながら、先行研究を乗り越えているかという点については、課題を残していることも指摘しておかなければならない。以下の4点にまとめておく。

第1に宗教指導層の視点について、リファイの思想に関してより広い文脈においた考察が望まれる。たとえば、本書ではリファイ運動にタレカット（神秘主義集団）の要素が欠如していることを特徴に挙げている。しかし、サルトノがタレカットを強調するのは1888年バンテン反乱の分析においてであり、農民運動一般の特徴とはしていない。実際、農民運動の文脈でのタレカットの台頭は1880年代以降とされている。したがって、リファイにおけるタレカット的特徴の不在は彼の特殊性ではなく時代性と理解すべきであろう。また、本書では、サルトノがリファイ運動を復興主義に分類していることを批判している（確かにジャワにおいて復興すべき理想のイスラームがかつて存在していた訳ではない）が、サルトノは、イスラームを本来のあるべき姿に戻そうとする傾向をそう名付けており、より一般的には同時代のイスラーム世界の新しい潮流を意識した命名であろう。この点では、むしろ、ラファンの研究 [Laffan 2003] が指摘するように、リファイを東南アジアにおけ

る最初期の改革主義者と理解することが今後の研究に有効ではなかろうか。著者は、あえて「社会学用語」による分析を封印しようとしているが、そのことが時に議論の展開を妨げているように思われる。

第2にプリヤイの視点について、オランダ政府と無条件に結託していたわけではないと指摘しているが、オランダとの関係性を強調する点はサルトノと変わらない。しかし、この点を前提にしつつ、プリヤイがジャワの伝統的文化の体現者であったという側面にもっと注目してほしいと思われる。なぜならこの側面の批判にリファイ運動の改革主義的特徴がよく示されているからである。

第3に宗教指導者とバングルやプリヤイの関係について、バングルの両義的な位置づけには本書でも触れているが、結論として「サントリ集団と現地人官吏・宗教官吏の溝は決定的」になったとする。この点はサルトノも同じである。しかし、リファイの父がバングル、祖父がプリヤイであったとされること、リファイの再婚相手が郡長の寡婦であったことなど、在野の宗教指導層とバングル・プリヤイが社会階層として接点を有していたことを推測させる史料が見受けられる。両者の関係については、より深い分析が必要と思われる。

第4に、社会的文脈の中に宗教運動を位置づけるという点で、第1章の経済状況の分析が十分に生かされていない。とくに、藍栽培からサトウキビ栽培への転換について多くの紙幅を割いているが、それがどのような影響を社会に及ぼしたのかは明らかにされていない。著者自身、このような影響を論証することは難しく客観的状况の記述にとどめる旨を述べているが、ここまで禁欲的になることなく、著者としての見解を示して欲しかった部分である。

最後に、これだけの労作であればこそ、編集上の見落としが散見されることが惜まれる。「ジャワ暦」と「ジャワ歴」、「現地人官吏」と「原代人官吏」の表記の混在はそれぞれ前者に統一されるべきである。p.52で「スラカルタのスルタン」とあるが、1857年当時のスラカルタの首長はスルタンではなくスフナンである。p.75の「1950年代」は「1850年代」の誤りである。pp.90-91で報告書か

らの引用部分と本文の間でフォーマットが混乱している。p.94の「リズム」は「韻律」とすべきである。p.95以下のクラーンの節番号はフリュージェル版よりもカイロ版の利用が適当であろう。p.141のリファイの著書の記述が付録のリファイ著書リストと対応していない。これに関連して、物理的な単位としての写本と著作物としてのテキストの区別を明確にすべきであろう。

結論的に言えば、本書は、19世紀ジャワを対象にした社会経済史の精緻な研究の進展に比して立ち後れていた宗教運動研究の分野において、ジャワ語の史料を駆使して新たな展望を拓いた優れた研究成果である。今後の研究は本書への参照が必須となろう。しかし、得られた材料からさらに議論を展開する余地が残されたとも感じられる。本書は、19世紀ジャワにおける宗教運動研究の新しい出発点としてこそ高く評価されるべき業績である。

(青山 亨・東京外国語大学総合国際学研究院)

参考文献

- Laffan, Michael Francis. 2003. *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma below the Winds*. London and New York: Routledge Curzon.
- Sartono Kartodirdjo. 1966. *The Peasants' Revolt of Banten in 1888: Its Conditions, Course and Sequel. A Case Study of Social Movements in Indonesia*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1973. *Protest Movements in Rural Java: A Study of Agrarian Unrest in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

倉沢愛子(編著).『消費するインドネシア』慶應義塾大学出版会, 2013, vi+310p.

この論集は、2012年3月に慶應義塾大学を定年退職した倉沢愛子が若手のインドネシア研究者とともに開催してきた研究会の成果を、現代インドネシアの「消費」を中心テーマにまとめたもので

ある。執筆者は編者倉沢をはじめとして全員がそれぞれ独自の視点からインドネシア調査を進めてきた研究者であり、各論文ともインドネシア社会の今（おもに2011～12年）を伝える興味深い研究成果が盛り込まれている。インドネシアでは拡大する「中間層」をターゲットとする日本企業の進出戦略が注目されている今日、まさに時宜を得た出版と言えよう。

まず各章の内容を紹介しよう。編者による「序」に続く8つの論文と9つのコラムから本書は構成されている。編者倉沢愛子の「序」では、「収入など経済的指標に基づいた中間層の定義はあえてせず、彼らの消費行動に焦点を置き、その特徴を分析するにとどめておく」(p.2)と述べている。そして、編者が長年にわたって調査を続けてきた、ジャカルタ南部の路地裏（カンボン）での調査経験にもとづき、「疑似中間層」という概念を提唱する[倉沢2001参照]。これは、「実際には経済力を伴わないが消費行動においてそれ[中間層]に類似している人々」(p.4)を指し、具体的には、「1日当たり2～4ドルの消費をする人たちのほぼ全部、そして4～6ドルの消費をする人たちの一部」(p.4)を含む概念である。また、「強い上昇志向」を「疑似中間層」の特徴の1つとして挙げる(pp.6-7)。

「第1部 市場の変容」には、売り手に注目して消費の現場の変容を取り上げた3つの論文が並ぶ。内藤耕の「第1章 伝統的市場（バサール）の近代化——ジャカルタ南部L市場をめぐって」では、「汚く」「臭い」と言われていたL市場が、建て替えによって「若返り」、「整然とした」空間に変わるとともに、そこで商売していた露店商（カキリマ）が排除されていった経緯を、市場のフロアプランなど詳細なデータにもとづき報告している。市場が「近代化」しても、相変わらず買い物客の約3割が路地裏にあるワルン（小規模店舗）の仕入れを目的として来ているという調査結果は、伝統的市場とインフォーマル・セクターとのつながりを考える上でとても興味深い。

松村智雄の「第2章 ジャカルタの衣料品市場の変容——タナアバン市場における西カリマンタン華人の役割」は、ジャカルタ中心部にある、大規模な衣料品市場として有名なタナアバンを取り

上げる。西スマトラ出身のミナシカバウ人がおもにイスラーム服を扱っていたタナアバン市場に西カリマンタン出身の華人が進出し、子ども服やスポーツウェアなど多様な衣料品を卸売するようになった過程を明らかにしている。彼らは1980年代以降、シンカワンなどからジャカルタに移動し、当初は縫製業を始め、その後タナアバンに進出するようになり、建物内の恵まれた場所に店舗を出すようになった。

間瀬朋子の「第3章 現代的な消費と『インフォーマル・セクター』——ジョグジャカルタ特別州スレマン県の学生街の事例」は、飲食物や生活用品などを商う「インフォーマル・セクター」と、その消費者である大学生の消費スタイルの変化を取り上げている。大通り沿いにファストフード店や「インフォーマル・セクター」風のモダンな定置屋台が増えたのに対し、路地裏では従来型の「インフォーマル・セクター」が価格抑制などによって生き残りを賭けた競争を展開している。一方、消費者である富裕化した大学生は、ショッピングモールやフランチャイズ店にのみ出入りするのではなく、下宿の周囲の小食堂や屋台を定期的に利用するという選択的消費行動を実践している。

「第2部 消費の変容」には、住宅を扱った2つの対照的な論文が並ぶ。新井健一郎の「第4章 ディズニー化する郊外——商品としての分譲住宅」は、1980年代以降、ジャカルタ郊外で造成が進む、塀で囲まれたクラスター住宅街を取り上げる。「疑似中間層」の上の「真正中間層」や富裕層を顧客とする、ラテン・アメリカ風などテーマパークのような住宅デザインを特徴とするニュータウンである。新井は、タンゲラン県のBSDシティに焦点を当て、その販売戦略から、住民のライフスタイルまで論じている。クラスター内部は、「外部の西ジャワの平凡な『インドネシア的』光景」(p.130)から隔絶し、行商人などが立ち入ることができない空間になっている。

南家三津子の「第5章 浴室タイルの家——東ジャワ海外出稼ぎ村における顕示的消費と社会変容」は、本論集のなかで唯一、農村社会を取り上げている。東ジャワ州トゥルンアングン県にある2村は、多くの女性労働者を海外に送り出している。

出稼ぎから帰った女性たちは、海外で得た収入でレンガ造りの家を建て、さらには家屋正面の外壁を浴室タイルで飾るようになった。南家は、これを顕示的消費と位置付ける。上昇志向が可能な都市の「疑似中間層」と違い、農村社会では飾り立てた家だけが「成功した証し」を周囲に示すことができる道具になっていると論じる。

「第3部 教育・文化の変容」には、教育とイスラームを扱う3つの論文が並ぶ。倉沢愛子の「第6章 消費行為としての教育——次世代に託す希望」は、カンボンにおける、上昇志向と結びついた教育への投資を論じている。倉沢が目にするのは幼児教育の普及であり、さらに有名校への進学を念頭に置いた学習塾の出現である。路地裏に住み「疑似中間層」に属する住民は、住環境への改善には関心がなく、それまでのライフスタイルの良い点に固執しつつ、子どもの教育に多額の投資をしている。

新井和広の「第7章 商品化するイスラーム——雑誌『アル=キッサ』と預言者一族」は、サイド（預言者ムハンマドの一族）を重視した編集方針を特徴とする『アル=キッサ』という隔週刊の雑誌を取り上げ、イスラームの商品化について論じている。ただ漠然とイスラーム一般ではなく、サイドの宗教者が「商品として大きな可能性」(p.266)を持っていると述べる。

野中葉の「第8章 イスラーム的価値の大衆化——書籍と映画に見るイスラーム的小説の台頭」は、イスラーム的小説とそれを原作とする映画を通して、「イスラーム的価値」の広がりを論じる。1990年代初頭に若い女性の間でイスラーム的短編小説が流行し、さらに2000年代半ばになると長編小説（たとえば『愛の章句 *Ayat Ayat Cinta*』）が登場し、映画化を伴って大きな話題を集めるようになった。これらの作品は、伝統的宗教権威に代わって読者にイスラーム的価値を提示したと論じている。

論文の他に、9つのコラムが現代インドネシア社会の消費を論じる上で欠かすことのできないトピックを取り上げている。紙幅の関係で一つ一つ紹介することはできないが、グルメ事情、コンビニ、サッカー・チーム、コス（下宿）、フェイス

ブック、携帯電話、音楽産業、ムスリマ（イスラーム女性）のビューティー・コンテスト、マッサージ産業と、それぞれ独自の視点からインドネシアの今を描き出している。

各章の内容をまとめてきたように、どの論文も緻密な調査から得られた具体的なデータを駆使してインドネシアの「消費」の諸相を描いているので、読者は本書から多くの知見を学ぶことができる。各執筆者による実証的な研究にもとづく論文だからこそ、目につく、現代インドネシア社会の変化していく表層だけの分析に留まるのではなく、人々の変わらない生活の営みにまでしっかりと目配りされている。内藤が第1章で取り上げているように、L市場が改装によって新しく生まれ変わっても、そこに来る買い物客の目的には大きな変化はみられない。また倉沢がコラムで指摘しているように、野菜の行商人からモール内のスーパーマーケットまで、買い物「場」と「スタイル」(p.107)を時と場合に応じて選択しているのが、ある程度、経済力をもった人々の消費行動である。

個々の論文の内容はすでに述べたように卓越したものであるが、論集全体に関わる見取り図の提示という点ではすこし不満が残る。それは「序」で編者倉沢が提示した「中間層」の捉え方に起因する。倉沢は、1996年の論文から一貫して階層を議論する際に、価値観やライフスタイルなど主観的ファクターを重視してきた[倉沢1996:106]。また、多くの「中間層」論と同様に[たとえばGerke 2000参照]、経済的水準の比較的高い層のみを「中間層」(英語のmiddle class)または「新中間層」と規定している。ゲルクなどの階層論を踏まえ、倉沢は「真正の中間層」と「疑似中間層」という区別を「序」で示している。たとえば新井が第4章で取り上げているクラスター住宅街は、「真正の中間層」にしか手の届かない高額の分譲住宅であり、一方、倉沢が調査対象とする路地裏には「疑似中間層」が数多く住んでいる。もちろん階層研究において多様なアプローチが可能であり、主観的ファクターを重視する研究者は多い。とはいえ、評者をもっと単純な経済的指標から階層を分類し、本書で取り上げられているいくつかの事

例の位置づけを考えてみたい。

佐藤は『経済大国インドネシア』において世界銀行の定義を採用し、1日1人当たり支出2~20ドルを「中間層」とし（この定義は倉沢も紹介している）、その中を「高層」（10~20ドル）、「中層」（4~10ドル）、「低層」（2~4ドル）に分け、さらに、「中間層」の下に「低支出層」（1.25~2ドル）と「貧困層」（1.25ドル未満）という階層を設定している。1999年から2009年にかけて、貧困層が縮小し、都市部と農村部の双方で「中間層・中層」（2009年に合計2,570万人）と「中間層・低層」（合計7,312万人）が増えたことを明らかにしている〔佐藤2011: 41-44〕。この「中間層・低層」がそのまま編者倉沢がいう「疑似中間層」に含まれる人々である。評者は、「疑似中間層」という括りではなく、「低支出層」に次いで多くの人口を占める「中間層・低層」に注目することこそ、「消費するインドネシア」を考える上で重要であると考え。また、『日経ビジネス』[2013]の特集にみられるように日系企業がターゲットとして注目するのは、この人口的に分厚く、今後所得をさらに増やすことが予想される「中間層・低層」であろう。

日本人一般の金銭感覚から見たら貧困層にみえる「中間層・低層」が、選択的消費を実践している。この点は南家の第5章と倉沢の第6章の対比から明らかになる。家計上の余裕を、東ジャワの農村ではタイルを使った家屋の改築に費やし、一方、ジャカルタ南部の路地裏では子どもの教育に投資する。インドネシア全体の経済成長によって、個々の世帯の可処分所得が増え、「低層」も含めて「中間層」全体が量的に拡大した。ただし、所得を個々の世帯が何に充てるかという問題は、けっして一概に言えることではない。消費スタイルにはインドネシア社会の多様性が反映されているのであり、地域と民族および宗教（もちろんムスリムを一括りにはできない）などさまざまな要因によって異なってくる。やはりジャカルタなど都市部だけで「消費するインドネシア」を論じるのではなく、地方も含めて消費行動を論じることが大切であり、南家が論じる東ジャワ農村の事例はその意味で貴重である。

第7章と第8章で論じられている「イスラーム

の商品化」と「イスラーム的価値の大衆化」は、従来はモスクや集会など直接的な形でもにもイスラームの教えに触れていた貧しい人々が、「中間層・低層」へ仲間入りするようになり、活字メディアと映像メディアを通してイスラームに接するようになった変化と関係していると考えられる。「中間層」の拡大は、もちろん日本発のマンガ・アニメやJKT48に代表されるようなグローバル化したポピュラー・カルチャーの人気とも結びついてはいるが、それだけではなくイスラーム的な読み物を選択する層の拡大とも結びついている。

以上、取り上げたように、中間層概念について気になる点はあるが、評者は本書から多くのことを学んだ。本書は、急速に経済成長が進む現代インドネシアにおける多様な消費の姿を知るうえで基本的な文献である。

（小池 誠・桃山学院大学国際教養学部）

参考文献

- Gerke, Solvay. 2000. Global Lifestyles under Local Conditions: The New Indonesian Middle Class. In *Consumption in Asia: Lifestyles and Identities*, edited by Chua Beng-Huat, pp. 135-158. London: Routledge.
- 倉沢愛子. 1996. 「開発体制下のインドネシアにおける新中間層の台頭と国民統合」『東南アジア研究』34(1): 100-126.
- . 2001. 『ジャカルタ路地裏フィールドノート』東京：中央公論新社.
- 『日経ビジネス』. 2013. 「特集 インドネシア——覚醒する『未完の大国』」1686号.
- 佐藤百合. 2011. 『経済大国インドネシア』東京：中央公論新社.

新井健一郎. 『首都をつくる』東海大学出版会, 2012, x+265p.

現代のジャカルタを特徴付ける言葉を並べるならば、交通渋滞や洪水といった都市問題や、バスウェイといった交通手段の名称、首都圏の行政単位の頭文字をあわせたジャボデタベック

(Jabodetabek) という首都圏の呼称、ステイルマン通りの高層ビル、そして郊外に広がる外資系工業団地や広大な住宅街、林立する巨大ショッピングモールであろう。かつてジャカルタがカンボン、ベチャ、モナス、メンテンといった言葉で形容されていた時代と比較すると、著者の新井が語るように、「ジャカルタではこの間『都市の成長』などといった生易しい言葉では表現できない巨大な断絶」(p. 1) を生んでいるかのような変化がおきている。

2010年センサスによると、Jabodetabekの人口総計は約2,800万人と東京圏に次ぐ世界第二の都市圏人口規模を有し、これはマレーシア一国とほぼ同規模である。この圧倒的な規模を有するジャカルタ首都圏の人口増加に伴う政治、経済、社会変化を理解する事は、第一に現代インドネシアを理解するためにも、第二に世界の他の首都圏との比較研究を行う上でも、避けて通れないテーマである。本書は、ジャカルタ首都圏がどのようにして変化してきたのかについて、その変遷を植民地期から現代を対象に描く。

その中で、本書の最大の魅力はこの変遷を民間土地開発業者を中心に据え、スハルト後期から現在までを分析する第三章「寡占的郊外化」において発揮される。本書のアプローチは、1990年代以降大都市研究のスタンダードとなったグローバルな経済システムの変化に焦点を当てて俯瞰するもの [Sassen 1991; Rimmer and Dick 2009]、また、経済成長に伴う中産階級の台頭の帰結として都市化の特徴を捉える研究アプローチや中産階級の生活スタイルや都市景観に現れる住民の集団的記憶を通じた分析視点 [Kusno 2010] と異なる新たな試みである。新井はこれらの分析に触れながらも、より政治経済学的なアプローチをとり、ジャカルタ首都圏の変化を決定づけたアクターとして、チプトラ (Ciputra) やインドネシア不動産企業協会 (REI: Real Estate Indonesia) に代表される民間土地開発業者を主たる分析対象に据えた。その理由として新井は、「次々と開発される華やかなショッピングモールや高層ビル、ニュータウン、他方で土地買収をめぐる住民と不動産業者や行政の強制執行部隊との衝突、誰の目にも見える大きな貧富の差、慢性的な渋滞と大気汚染、こうした

諸側面をある程度体系的に把握し問題と切り結ぶには首都圏レベルでの政治経済学的なアプローチが不可欠だと考えたからである」(p. 228) と説明する。

大都市の変遷を民間の土地開発業者に焦点をあてて分析することで、新井が切り開くことに成功した知見が三点挙げられる。

第一にジャカルタの抱える都市問題は、1993年に発令された政府令により、民間土地開発業者に大規模な土地の「囲い込み」を許したところに根本原因があるという点である。

1993年に発布された規制緩和パッケージ (Paket 1993) は大統領に近い一握りの民間土地開発業者にジャカルタ首都圏の土地の「囲い込み」を許し、「二つの点でジャカルタの土地利用に深甚な影響を与えた」(p. 73)。第一にそれは、「既発行の用地開発許可の対象となった面積は首都圏開発業者の実際の供給能力とあまりに乖離しており、その大部分が早いうちに開発されることはありえなかったこと」(p. 73) であり、「仮に現行の供給能力を前提にすれば消化に40年間もかかる面積が、わずか数年の間に用地開発許可の制約下に置かれることになったのである [Properti Indonesia 1997 April: 20]」(p. 73)。第二に、「1993年の決定により、用地開発許可の対象となった土地は許可保有者以外に売却することを禁止されたので、地主は取引の自由を奪われた」(p. 73)。「この結果、首都圏全域の膨大な土地が、その売買権を開発業者の手に握られたまま凍結状態になったのである」(p. 74)。

Paket 1993が発令される前、スハルトは「1970年代前半に意図した体制秩序安定化の拠点としての郊外の位置づけ」(p. 82)を進めていたが、Paket 1993によって首都圏郊外の土地が広域にわたって土地投機と大型ニュータウン事業による囲い込みの対象となったことで、「なし崩し的に骨抜きに」(p. 82)なり、国民国家の論理の通じない排他的な空間秩序がジャカルタ首都圏に広く形成されてしまった。

民間土地開発業者の寡占的な土地囲い込みにより、広大な首都圏の土地に排他的開発権が設定され、この開発権を獲得した一部の業者の判断でジャカルタ首都圏の広大な土地が投機と凍結の対

象となったがゆえに、それ以降の中央政府の都市計画は、実行段階においてこの開発権の壁に阻まれ、その結果、数々の都市計画が骨抜きにされることになったと新井は喝破している。いわずもがな、これこそがその後のジャカルタの治水対策や大量輸送交通システムの整備が遅れた事の根本要因となったと読める。現在のジャカルタのインフラ整備の不備や都市計画実行の難しさを理解する上で、1993年のもつ歴史の分岐点を明らかにしたところは本書の最大の魅力であり、ジャカルタを学ぶものにとって本書が必読書になるゆえんでもある。

ジャカルタを歩けば、乱立する高層ビルの中に都市中心部にもトタンの壁に囲まれた広大な空き地が点在していることに気づく。過密化がすすむジャカルタで、なぜ広大な土地が中心部に空き地としてのこっているのか。こうした歪なジャカルタの景観を理解する上で、ここで新井が指摘した1993年の「囲い込み」の歴史を知る事で、理解は容易となる。

第二に、民間土地開発業者を中心に据えて分析することでより明らかになるのは、ジャカルタの住宅問題、とりわけ廉価住宅の供給不足の問題である。廉価住宅の供給不足は、ジャカルタに限った話ではなく、アジアの各大都市において同様に生じている問題である。新井は、住宅問題とは最終的に住宅供給不足を超えた「都市空間と社会秩序の再編」問題であり、なによりも、都市内の経済格差を空間によって固定化する力、すなわち社会秩序の再編に直結する問題であると規定する。そこには、氏の強い問題意識であるジャカルタの貧富の格差問題の解消を読み解く重要な知見がある。

結論を先取りするならば、貧富の格差解消が難しいのは、格差を固定化する社会構造があるからである。この固定化は、居住環境の違いによるところが大きい。したがって、ジャカルタの貧富の格差を解消するならば、問うべきはなぜジャカルタの経済的下層住人の生活環境を支える廉価住宅の供給がそもそも少なかったのかという点になる。この問いの答えについて、新井は土地開発政策の失敗原因を以下のように特定している。

ジャカルタにおいて土地投機が加熱し、開発予

定地が大規模土地開発業者に囲い込まれる中で、政府は1992年各開発業者に対して受託開発にあたっては高級住宅、中級住宅、低価格住宅を1:3:6の比率で建設を義務づける大臣決定書を発令した。「しかし、この規定は罰則規定がない上、実際の適用過程で多くの抜け穴があり、徹底的な骨抜きの対象となった。現実に廉価住宅が建設された場合も大部分はジャカルタの通勤圏外で、代替的な雇用機会もない場所であった」(p.74)。その後、地価の高騰に伴い、中・低所得者層を都心から追い出す一方、通勤用公共交通インフラの整備が進まなかった結果、より多くの中・低所得者層が首都圏周縁部へと追いやられ、通勤者は通勤運賃が収入の40%にも上り、その負担に苦しむ事になった。

スハルト政権崩壊後、この骨抜き状態は改善されるどころか、悪化した。政府は廉価住宅建設を開発業者に求めることすらなくなり、国際通貨基金(IMF)管理下の財政運営では、低利住宅ローンのための財源確保も失い、さらに地方分権を受けて開発のための(非正規な)許認可費用が膨張したことで、開発業者は利益率の低い廉価住宅を忌避し、状況改善はより望み薄となった(pp.210-211)。経済危機後に景気が回復し始めると、主要土地開発業者らの多くは高級・中級住宅で大きな利潤を得る事に専心し、「購買力のない膨大な都市住民を置き去りにする形で都市の再編が進んでいる」(p.222)。

大型土地開発事業による土地ストックの囲い込み、首都郊外での地価高騰、通勤インフラの未整備、政府財源不足の問題ゆえに、都市内格差は廉価住宅の供給不足という形で固定化されている、という本書の指摘は、急速な都市化において、都市内格差の解消に苦しむすべての国にとって廉価住宅供給の重要性を説得的に説いている。土地開発事業主に廉価住宅の建設を促す実行可能な政策的パッケージにまだ妙案は提示されていないものの、廉価住宅の存否が都市開発の将来につながるという新井の指摘は、ジャカルタ首都圏を超える示唆を持つ。

第三に本書が土地開発業者の行動を通じて提示する論点は、私企業中心の不動産産業の行動がジャカルタという街に「どのような緊張をもたら

し、どのような対立や断列線を生み出して来たのか」(p. 228) という点である。

1970年代には国民住宅公社を通じた分譲住宅街の開発を通じて、政府は「ジャカルタという都市にインドネシアの中心にふさわしいイメージと秩序を与え直し」(p. 49)、1990年代には、さらにスハルトが開発業者に地名のインドネシア語化を強いて、「無国籍化していくジャカルタの都市空間に『ナショナリズム』や『伝統』の印を再刻印することで、国民国家の中心という象徴性を取り戻そうと企てていた」[新井 2013: 151]。

しかし、「首都圏郊外に大型ニュータウンが占めるようになった空間の圧倒的拡がり」と、そこで大流行したテーマ住宅街における異国趣味や海外イメージの商品化は、もはやそうした古典的なナショナリズムの領域化の試みを圧倒し、その有効性を失効させてしまったかのよう」[同所]であった。

首都圏において、ナショナリズムの領域化に失敗すると、「現在の首都圏の中にも不気味な活断層のような形で存在している」(p. 229)「華人」と「プリブミ」といった人種や「イスラム教」と「キリスト教」という宗教に沿った断列線をめぐる緊張や抗争が噴出する危険性が高まる。しかも、先に述べた、廉価住宅供給不足問題が一向に解決されないことで、都市下層民の周縁化が空間的に固定化される状況下では、溜まった「人々の不満を宗教的マイノリティや新移民への敵意へと差し向けよう」と(p. 223)する勢力があり、「そうした勢力の活動が先導する形で、首都圏の社会秩序の中に暴力と敵意の深い断列線が引かれつつある」(p. 223)ことが、潜在的な社会不安要素となる。それは、排他的に上・中間層の需要を優先する土地開発業者の行動が、多くの下層住民の経済基盤、生活様式、価値観を揺るがし、社会秩序と空間秩序を変え、住民の多くに自分たちが周辺化されつつあるという不満や不安を抱かせることになるからである。ゆえにジャカルタの土地開発は常にこうした社会的断裂が表出する危険と隣り合わせになるのである。

ジャカルタの土地開発の変遷を民間の開発業者

に焦点をあてて紡ぎだした本書はジャカルタ研究、インドネシア研究、そしてアジアの大都市研究のすべての読者にとって、待望の一冊であった。土地開発業者と当局者の官民関係を中心に都市ガバナンスの権力関係を丁寧な手法で追う手法は、ハンターがかつて米国アトランタの分析で行った Community Power Structure の研究を彷彿とさせる [Hunter 1953]。アトランタのように、政策決定に関わる民間アクターが特定しやすいリジョーン市では有効だった声価法的手法は、ジャカルタのような無数のアクターが割拠する首都にして 2,000 万人を超える大都市圏の分析にはそのままではそぐわない。新井は「声」に注目するのではなく「土地の広さ」に注目して、民間土地開発業者のもつ現代的な重要性を再確認した。Ciputra や REI のメンバーが「囲い込んだ」土地の広さやその割合の高さについて、第三章において丁寧に情報処理をすることで、まさにハンターと同じように民間業者と地方政府の権力関係、権力闘争から都市の変遷を説明する事を可能にした。

本書の主役である Ciputra らの民間土地開発業者については多くの研究があり、彼らのビジネスモデルや立身出世の物語について、Dielman や Winarno らが詳述している [Dielman 2011; Winarno 1988]。しかし新井は先行研究から一歩進んで、Ciputra が設立した REI 内のダイナミズムや Ali Sadikin との関係を詳述し、さらに経済危機後に破綻し、キリスト教に傾倒する Ciputra の不安定な姿にまで迫る。民間土地開発業者を中心に論じるときは、彼らの立身出世の物語を賞賛するか、あらゆる不平等の元凶として悪魔化することが定石である。本書がジャカルタの抱える矛盾、都市化の影の部分土地開発業者に注目して照射することに、その目的の一つがある以上、Ciputra などの土地開発業者を安易に悪魔化する誘惑はあっただろう。しかし著者は Ciputra の心情描写にまで深く入りつつその振幅を都市開発の不安定性として読み、冷徹に分析を行う。行間に滲む、ジャカルタの抱える様々な矛盾、問題への新井の強い問題意識とそれとは対照的な冷静な筆致が、本書の説得力と魅力を増している。

(相沢伸広・九州大学比較文化社会研究院)

参考文献

- 新井健一郎. 2013. 「ディズニー化する郊外」『消費するインドネシア』, 倉沢愛子(編), 121-154 ページ所収. 東京: 慶應義塾大学出版会.
- Dielman, Marleen. 2011. New Town Development in Indonesia: Renegotiating, Shaping and Replacing Institutions. *Bijdragen tot de Taal-, Land- En Volkenkunde* 167 (1): 60-85.
- Hunter, Floyd. 1953. *Community Power Structure: A Study of Decision Makers*. Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press.
- Kusno, Abidin. 2010. *The Appearances of Memory: Mnemonic Practices of Architecture and Urban Form in Indonesia*. Durham, NC: Duke University Press.
- Rimmer, Peter James; and Dick, Howard W. 2009. *The City in Southeast Asia: Patterns, Processes and Policy*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Sassen, Saskia. 1991. *The Global City: New York, London, Tokyo*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Winarno, Bondan. 1988. *Tantangan jadi peluang: Kegagalan dan sukses pembangunan jaya selama 25 tahun*. Jakarta: Pustaka Utama Grafiti.

櫻井義秀(編著). 『タイ上座仏教と社会的包摂——ソーシャル・キャピタルとしての宗教』明石書店, 2013, 356p.

本書は、編者の櫻井義秀と、タイの開発僧や新しい仏教運動について研究を続けてきたタイ研究者四名及び北海道大学で修士号や博士号を取得した四名の研究者が執筆した九つの論文から構成される。書名が示すように、「ソーシャル・キャピタル」という概念を用い、現代タイ社会において、タイ上座仏教が新たな社会的包摂の役割を果たすことを論じたものである。

編者の櫻井は、長きにわたってタイ社会における上座仏教の貢献に関する研究を積み重ねてきた

と同時に、仏教の社会貢献という概念を社会科学的に定義することの難しさを指摘してきた。本書は、「ソーシャル・キャピタル」概念を用いて、「社会の複雑化・文化によって地域や民族の出自が異なるもの同士を結集させ、まとめてきたものが宗教により創出された新たな共同性」(p.14)であるとし、宗教の社会貢献をより絞り込んで考察するものである。

各論文の議論に先立って、本書が掲げた「社会的包摂」「ソーシャル・キャピタル」「タイ上座仏教」という三つのキーワードを整理しておきたい。この三つのキーワードは編者が執筆した序章と第一章において詳しく論じられている。「社会的包摂」とは、現代社会において排除されている人々を改めて社会に参加させることである。かつてタイ研究者はしばしばこの問題を〈都市—農村〉の格差という概念で説明してきた。一方、櫻井は、近年のタイ社会の再編によって、こうした二分法でとらえるのではなく連続体としてとらえるのがよりふさわしいとした(p.52)。つまり、〈都市—農村〉の格差よりも、地域や家族などの共同性を失い、多様な階層分化によって、互助共同のサポートやコミュニティを持っていない人たちが現代タイにおいて排除されているという。「社会や他者への一般的な信頼、互酬性規範、互助的ネットワークの総体を概念的に示す言葉」である「ソーシャル・キャピタル」は、前述の社会的包摂の文脈の中で重要な役割を果たすものと考えられる。さらに、本書が主たる対象とした「タイ上座仏教」は、公共宗教としてタイの政治や社会と密接に関わる一方、櫻井の表現を借りれば、「百貨店」(p.18)のように多様な宗教行為が含まれており、タイ社会における「社会的包摂」のコンテキストの中で、「ソーシャル・キャピタル」の役割も期待できる。本書の各論文は、この三つのキーワードを念頭に置いた事例の考察であると考えられることができる。以下では、この三つのキーワードに着目しながら、第二章以降の各論文について論じたい。

まず、「社会的包摂」というキーワードに関わるのは第二、三、五章の論文である。それぞれの論文は、社会の主流から排除された子どもたち、

HIV/エイズ患者、障害者を取り上げ、彼らがいかにして社会に再び包摂されるのかを論じている。

第二章の北澤泰子論文は、「生き直し学校」と「子供の村学園」の二つの NGO が設立した児童養護施設と寄宿学校を取り上げた。「生き直し学校」は麻薬や非行、家庭崩壊で学校に継続して通えない子どもたちを対象に、共同生活を通して「心の開発」を行い、彼らの新しい人生を目指す施設である。一方、「子供の村学園」は遺児や孤児、貧困、家庭崩壊、虐待が原因で社会から排除された子どもたちを対象に、自発的な学習に取り組む寄宿学校である。この二つの事例を通して、タイにおいてインフォーマル教育が社会的包摂の一端をなしている現状を描き出した。

第三章の佐々木香澄、櫻井義秀論文は、二十数年間エイズ・ホスピスを続けているプラバートナンブ寺院の事業内容と現場の状況を取り上げた。新薬開発と保健医療制度の充実によって、プラバートナンブ寺院の事業の中心は終末期ケアから慢性病に向き合っている人々のケアへと変わってきた。ここでは、死者の看取りよりも、「社会で役に立たない、要らないと思われる人たちが集まって、再び用いられるようになるコミュニティ」(p.132) という概念で、伝統的な家族やコミュニティから排除された患者たちの共同体の形成とスピリチュアルケアの回復過程を重んじている。

第五章の浦崎雅代論文は、カンボン・トーンブンヌム氏のライフヒストリーを通して、瞑想実践を障害者の生きる技法として考察した。事故に遭って障害者になったカンボン氏は、家族や親戚の身体の介護があっても、心の苦悩は解決できないという。その後、「ただ観る」という瞑想実践を通して、苦しみを克服し、さらに仏教の「善友」という概念を実践することで、開発僧や障害者たちと結びつく。この事例は、障害者は伝統的な家族などの繋がりから決して排除されてはいないものの、心のケアとして、仏教の瞑想実践を通じた新たな繋がりというソーシャル・キャピタルの形成が見られることを示している。

次に、「ソーシャル・キャピタル」を他者との繋がり、すなわち共同体やネットワークを作り出す

ことと理解する論文として、第四章と第七章がある。この二つの章では僧侶たちのネットワークと学校、仏教寺院、家庭などとの新たな繋がりを論じている。

第四章の岡部真由美論文は、国際 NGO と北タイエイズケアに携わる僧侶たちのネットワークについて考察した。国際 NGO は寺院をタイ地域コミュニティの中心をなす資源とし、地域コミュニティのソーシャル・キャピタル化を期待して僧侶のネットワーク形成を推進する。しかし現実には、他宗教との対話や、地域コミュニティの社会開発というよりも、僧侶のネットワーク形成を通して、僧侶、寺院そのものがソーシャル・キャピタル化されているのである。

第七章の矢野秀武論文は、「仏教式学校プロジェクト」と「善徳プロジェクト」の二つの宗教・教育運動を事例に新たな仏教と社会の動きを論じた。二つの運動は、「学校への注目、国王崇敬との連動、問題解決を通じた集団化」という三つの認知的な側面では、従来の仏教や国王という価値を社会秩序の基盤とする認識は変わらないものの、ソーシャル・キャピタルのネットワーク側面に新しい風を吹き込むものである。要するに、「家族や地域共同体の繋がりが揺らぎはじめている状況に危機意識を持ち、新たな形で繋がりの再構築を目指す活動」(p.257) であり、学校教育の仏教化によって、新たな「ソーシャル・キャピタル」が生まれる過程を検討した。

第九章のティラボン・クルプラントン論文は、同じくタイ仏教寺院が作ったソーシャル・キャピタルを論じているが、そのコンテクストはタイ社会ではなく、ドイツにおけるタイ人のネットワークにある。先行研究では、ドイツ国内で活動するタイ人団体が少ないために、生活上の問題を抱える在独タイ人は少数の仲間や自分の家族しか頼れないとされてきた。しかしティラボンは、本章で、近年設立されたタイ寺院により、在独タイ人のネットワークが拡大し、相互扶助的な役割が果たされていることを明らかにした。ドイツ社会に接近するところまでは踏み込んで論じられていないが、仏教寺院がタイ移民たちのソーシャル・キャピタルとして包摂されている現実がよく示されて

いる。

第六章と第八章は上で述べた三つのキーワードの論理にはいささか一致しない。強いて言うならば、三つ目のキーワードである「タイ上座仏教」の新たな役割や思想を提示したものと見える。

第六章のスチャリクル・ジュタティップ、櫻井義秀論文は、2011年の大洪水に際して、三つの寺院がとった対応の実態報告である。洪水の前と最中、そしてその後の対策と支援の実態を分析した。政府の防災・福祉機能が不十分なために、寺院が代わって地域防災・福祉の役割を果たしている一方、寺院の名声や規模などによって、支援力に差が見られる。この論文は仏教寺院が防災と復旧に果たす社会貢献を論じているが、共同体づくりの「ソーシャル・キャピタル」機能を果たすとは言い難い。興味深いのは、むしろ寺院間の格差以外に、寺院と地域住民たちの間に齟齬が見られることは、「ソーシャル・キャピタル」論がカバーできない社会の一面を示していると言えよう。

第八章の泉経武論文は、現代タイの知識人プラウエート・ワーシーがスピリチュアリティ（チットウィンヤーン）概念をタイ仏教に導入したこととそれに対する反論について論じたものである。「チットウィンヤーン」の概念はプラウエートにとって「宗教の回復」と「宗教間相互の対話」の意味が含まれているが、一方で、これは元来キリスト教の用語であり、仏教の教えが覆い隠される恐れがあると批判する立場もある。本章も前述のソーシャル・キャピタル論とはやや外れているものの、近年のタイ仏教の危機感と知識人の新たな歩みを示した。

本書は、タイ上座仏教とタイ社会の関係に加えて、これらに関する研究にも新たな視点をもたらした。まず、タイ上座仏教とタイ社会の関係について、泉論文でも言及されているように、昨今、僧侶による金銭の不正授受や猥褻行為などの報道がしばしば耳に入り、タイ上座仏教に対する不信感と危機感がますます高まっている。これに対し、本書の各論文では、事例を通してタイ上座仏教の新たな社会貢献の在り方を示すことで、改めてタイ現代社会における上座仏教の役割を問い、そし

てその可能性を提示した。

また、本書は、タイ上座仏教に関する先行研究において示されてきた都市部の新興仏教運動と農村部の開発僧運動という〈都市—農村〉の分断ではなく、現代タイ社会の再編過程で排除された人々が、さまざまな場において改めて上座仏教により社会に包摂される、という新たな視点で描いている。言い換えれば、以前の経済発展による〈都市—農村〉格差による差異という議論に代わり、エイズ患者、障害者など互助共同のサポートやコミュニティを持ちにくいことが差異として現れると論じ、現代タイ社会における新たな分断というこれまでにない視点を与えた。さらに、この新しい排除の構造において人々が社会に包摂される場面に「ソーシャル・キャピタル」という概念を導入して説明を試みたのである。

しかし、本書では、それぞれの著者の研究関心によって、各論文は異なる概念の組み合わせを重んじて書かれており、すべての論文が冒頭で論じた三つのキーワードに沿って展開するものではない。それゆえに、中心となる「ソーシャル・キャピタル」概念も時にあいまいになっており、本来社会貢献より意味を絞ったはずの「ソーシャル・キャピタル」という概念が広い意味にとどまっているケースが散見される。いくつかの章では、確かに上座仏教を通して現代社会における新たな人間関係や互助的なネットワークが発見されるものの、多くはむしろ上座仏教の役割を強調する結論を導いている。

また、「社会貢献」を強調するがゆえに、形成された人間関係やネットワークの中の人々の差異と分断に関して、さらなる分析は行われていない。例えば、ドイツのタイ寺院の例や洪水に対する各寺院の対応の例では、異なる寺院の機能、そして共同体と思われていた寺院と地域住民の間の齟齬は、より詳細に検討する余地がある。「ソーシャル・キャピタル」が社会貢献となる「良い面」にとどまらず、問題点となる「悪い面」にも着目することで、現代社会における「ソーシャル・キャピタル」の全貌がより明らかになるだろう。

とはいうものの、本書の各論文は、詳細な事例の検討を通して改めて現代のタイ社会におけるタ

い上座仏教の役割や貢献を示した点において、高く評価されるべきものである。筆者はタイ宗教・社会研究の後輩として、本書から多岐にわたって多大な示唆を得た。今後も各著者の研究のさらなる展開を期待したい。

(林 育生 [LIN Yu-Sheng]・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

黄蘊 (編). 『往還する親密性と公共性——東南アジアの宗教・社会組織にみるアイデンティティと生存』 京都大学学術出版会, 2014, iii+266p.

本書は、京都大学「親密圏と公共圏の再構築をめざすアジア研究拠点」のプロジェクトの成果であり、新進の若手研究者7人による編書として、シリーズ『変容する親密圏/公共圏』の一冊を成している。

広く知られているように、公共圏を対象とする議論はハーバーマスに始まった。しかし市民による討論空間が世論を形成し、政治権力へと対抗する公共圏を形成するとの“西洋的市民”を中心とした概念は [ハーバーマス 1973]、社会的弱者を切り捨てる可能性をも孕んでいる。では、急激な近代化が推し進められる東南アジア地域において、女性や貧民など周縁化されてきた人々は、いかに生存し社会と関わっているのか。これが本書の問いである。

通常このような者たちは、私的領域である親密圏を形成し、相互扶助により生存を図るだけでなく、時に団結し公共圏に対抗すると認識されてきた。これに対し本書は、親密圏—公共圏を分けず一体のものとして捉え、共同体はその濃淡の中を変化していると言う「ベクトル論」による考察を唱える (p.4)。このような視点に基づき本書では一貫して、親密性の強い共同体が、公共性を志向し変化する過程が描かれている。共同体はいかなる時に公共性を持ち、その変化は、どのような社会状況と権力関係を示しているのか。本書は、東南アジアにおける宗教・社会組織の変化を通し、親密圏・公共圏を捉え直そうとする労作である。

本書は序章と終章の他、以下の4部7章から構成されている。

■ I 部「親密圏による公共性の構築、獲得」

第1章 「過平安橋」—— シンガポールの広場に出現するゆるやかな公共性の場 (伏木香織)

第2章 家庭内祭祀から公共領域へ—— マレーシア華人社会における「盂蘭勝会」の都市的構造 (櫻田涼子)

第3章 移民社会における「親密圏」の機能と変容—— マニラ華人社会における伝統的組織 (松嶋宣広)

■ II 部「公共性・公共圏の意図せぬ生成」

第4章 民衆が創出する都市の親密性と公共性—— ベトナム・ハノイの宗教施設「ハビ亭」と同郷会 (長坂康代)

第5章 スピリチュアリティの親密圏から公共性へ—— イスラーム世界マレーシアの「仏教公共圏」 (黄蘊)

■ III 部「地域社会の親密性・公共性に通時的にかかわる『伝統的な力』」

第6章 親密性・公共性の変容と伝統的な力—— 北タイ・チェンマイの霊媒術を手がかりに (福浦一男)

■ IV 部「複数の公共圏の競合とその中での往来」

第7章 貧者にとっての親密圏と公共圏—— マニラ首都圏における露天商組織の連帯と抵抗 (日下 渉)

I部の1-3章では、シンガポール・マレーシア・フィリピンの華人共同体が分析される。従来、同郷・同業者組合として閉鎖性が強調されてきた華人共同体であるが、近代化に伴い存続が危ぶまれるようになっていく。彼らは、いかなる生存戦略の下で組織を維持しようとしているのか。これがI部の問いとなっている。まず第1章ではシンガポールを舞台として、霊媒集団が組織する宗教儀礼が分析される。この儀礼は新聞で告知された後に駅前広場で催されるため、不特定多数の人間の参加を前提にしている。外部から参加する者の多くは、医療・年金・高齢者問題など政府が未対応の社会問題に直面しており、霊媒は彼らに精神的

な救済を与える。しかしその一方で、問題の根本的な解決を目指し、政治・社会運動へと結び付く事はない。著者はそこに、共同体外部の者も取り込み緩やかに連帯し合う、公共圏の出現を見出している。続く第2章では、マレーシアの住宅団地における盆儀礼の変化が分析される。従来は旧暦7月に親密性の強い共同体単位で行われる儀礼であったが、人々の移動が増加した近年は居住地単位で行われ始めている。伝統的社会から離れた者たちが集う「場」で行われるようになった盆儀礼は、互いに無縁であった個人々人を再結合する役割を果たしている。また、この儀礼集団は「盆」という季節的なものから拡大し、慈善団体として活動を定着させつつもあり、そこに親密圏の拡大が認められている。第3章では、宗親会・中華総商会・華文学校という、華人共同体を代表する諸組織が事例となる。しかし彼らであっても人員の減少は否めず、海外進出や現地化などネットワークの拡張を余儀なくされている。この拡大は自らのアイデンティティを弱める可能性を持つ一方で、公共空間への進出を可能にするものでもある。新しい成員を取り込むことで公共性を獲得し、「緩やかな連帯」を軸とした新しい親密圏を築いているのである。

II部の4-5章では、ベトナム・マレーシアの都市部を舞台に、親密圏の変質が分析される。多種多様な価値観が混ざり、複数の選択肢が存在する都市において、なぜ住民たちは親密的共同体から公共性を派生させているのか。この選択の背景にある社会状況が明らかにされる。第4章では、首都ハノイに位置する「亭」という施設をめぐる、地域住民と行政との折衝が描かれる。この施設は都市住民にとって、出身村落の守護神を祀る宗教機能と、集会所という社会機能を併せ持つ、曖昧な存在であった。しかし近年、社会主義政権により宗教の再評価が進み規制が緩和される一方、都市開発により史蹟管理が強化されたことから、住民たちは自治を求め、「亭」の重点を宗教寄りに変えていく。そこには、広く周辺住民に開放し支持された宗教施設となることで、政府の管理から逃れようとする住民側の戦略が存在している。第5章では、マレーシアにおける上座仏教の変化が、

伝統的寺院と修行型新興寺院の事例を基に分析される。上座仏教の在り方でさまざまなマレーシアであるが、慈善活動や短期体験プログラムなどを通して、海外との結び付きが強化され始めている。この背景には、人材・資金面で大きな割合を占める華人の志向と、広く英語が用いられるため「脱国家化し易い」マレーシア上座仏教界の事情が存在している。上座仏教としての知識を守りながらも、ニーズに合わせ国内外へと活動を広げていく様子を、国境を越えた親密圏の成立が指摘される。

III部を構成するのは6章のみであるが、ここでは社会の「伝統知」が、いかに今日の親密圏・公共圏に関わっているかが考察される。その伝統を体現する存在として取り上げられるのは霊媒師であり、彼らは今日、その人数だけでなく影響力を拡大させている。著者はタイプの異なる2人の霊媒への調査を通し、彼らが持つ適応性こそが、その影響力を保持させ、今日まで存続・拡大してきた理由であると指摘する。近代化が進み都市住民が増える中、霊媒たちは伝統的な親密性および秩序を重んじながらも、顧客の精神的要求に適応し続けることにより、自らを中心とした親密圏を構築しているのである。

IV部は、社会に同様の公共圏が複数存在することを前提に、その利害関係や衝突を描いている点において、他の章とは視点を異とする。それを構成するのは第7章であり、フィリピンの貧困層である露天商を事例に、市民的公共圏と大衆的公共圏の競合が論じられる。彼らの生計は不法占拠・街頭販売といった非合法的活動を伴っているため、しばしば「市民」からの批判に晒される。政府は新たな法的枠組みを創設することで露天商らの活動を規制しようとするが、貧困層は賄賂などを駆使してこれを回避し、市民からの排撃に対しても互助関係を発展させ対抗する。つまり、法治主義を強化すればするほど、不法行為（賄賂）が強化されるジレンマが生じているのである。著者は、この解決のために露天商たちの意向を反映した新しい法的枠組みの必要性を指摘した上で、市民的公共圏側からの働きかけ・妥協の必要性にも言及している。

何よりも本書最大の特徴は、視点の多様さと、

その記述を可能にしている情報量の豊富さであろう。また著者たちは共通の問題意識のもとで組織に焦点を絞った調査・考察を行っているために、「親密性の強い共同体が拡大している」との議論の方向性が明確である。従って本書を通読することにより、国家制度や社会状況といった諸条件や内因・外因の異なりを超え、今日の東南アジア社会において社会的弱者の共同体が拡大傾向にある様を確認することができるだろう。

しかし上記に挙げた視点の多様さは、一冊の書籍としての本書に、散漫な印象を与えてしまう可能性を持っている。副題に『東南アジアの宗教・社会組織』を掲げながら、本書の大半が中華圏の事例に集中しているように、その要因には章構成の偏りが存在する。議論の内容としても、互助組織・ネットワーク・伝統復興・曖昧性など、華人研究を前提とした議論が展開される 1-5 章と、より広い社会性を対象とした 6-7 章とが乖離している点は否めない。その結果として、序章における数々の問題提起が、「様々な動機、戦略のもとで多種多様な、また伸縮可能な親密性を結んでいる」(p. 252) との結論に収束してしまった事は残念であった。

加えて、せっかくのベクトル論が「親密圏が公共圏寄りに拡大している」という方向性を示すことで終わり、濃淡に関しては殆ど描写されていない点も気に掛かる。本書では共同体が「ネットワーク/互助」を軸に拡大していく様が肯定的に捉えられているが、そもそも超場所的な空間とは公共圏に限られたものではない [テイラー 2011: 145]。ならば事例を増やすだけでなく、それぞれの共同体が持つ排他性と向き合うことで、拡大の内容と背景の因果関係まで論じる事が可能だったのではないか。例えば本書で扱われた多くの共同体では、公共圏が持つはずの言論空間が形成されぬまま、社会活動や海外進出など特定の方面への拡大ばかりが認められているが、これは単に、言論空間を形成できなかつた結果に過ぎないのではないかとも思ってしまう。このような疑問に答えるためには、外部社会との関係性をより客観的・多角的に分析する視点が必要だったように思われる。

もっとも、上に挙げた指摘は編書の難しさを示すものである。今日生じている共同体の変化を通し、東南アジアにおける近代を再考する本書の姿勢は広く共有されるべきであり、今後の研究継続が期待される。

(北澤直宏・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

参考文献

- ハーバーマス, ユルゲン. 1973. 『公共性の構造転換』細谷貞雄(訳). 東京: 未来社. (原著 Habermas, Jürgen. 1962. *Strukturwandel der Öffentlichkeit*. Neuwied: Luchterhand.)
- テイラー, チャールズ. 2011. 『近代——想像された社会の系譜』上野成利(訳). 東京: 岩波書店. (原著 Taylor, Charles. 2004. *Modern Social Imaginaries*. Durham: Duke University Press.)

石原正仁; 津田敏隆. 『最先端の気象観測』シリーズ新しい気象技術と気象学. 東京堂出版, 2012, 175p.

本書は大気の中で起こっている現象である「気象」観測に関して、GPS 気象学、宇宙からの気象観測、リモートセンシングなど、最新の気象観測を一般向けに解説している。気象学自体は理学であり、論理の美しさや、個別の現象の解明が求められる。しかし気象観測や天気予報には多分に工学的センスが必要であり、本書における著者のスタンスもやや工学寄りである。気象観測は理学と工学の融合という視点で見ると最も成功した分野の 1 つであり、しかも世界的に日本がトップクラスと認められている分野である。現在の地位を築くに至った先人達の努力を、現場における小話も交えながら分かりやすく解析している。

本書の構成

本書は 8 章で構成され、第 1 章「気象観測の全体像」では、地球大気の成り立ちと構造に関して、

一般的向けの解説をしている。やや耳慣れないであろう専門用語も含むが、それらに関して説明も行われている。さらには、気象観測の目的と広がりに関して、日本と世界を比較しながら紹介している。

第2章「気象観測の歴史と直接観測」では、気象観測に関して、近代科学の黎明期から現在までの歴史が述べられている。世界初の気圧の測定に、ガリレオ・ガリレイに招聘されたトリチェリが水銀を用いた事例から、現在のシリコンを用いた静電容量式気圧計までの歴史など、当時の時代背景も踏まえて記述している。そのほかにも、気温における華氏と摂氏の歴史や、湿度、雨、日射量などの解析を行っている。さらには、高層気象観測のルーツとして熱気球観測を紹介し、現在のGPSゾンデ観測までの変遷を記述している。

第3章「電波と音による気象観測」と第4章「ライダーと光計測」は本書の中心ともいえる部分で、電磁波と地球大気の関係に関して丁寧に説明している。なお電波と光を合わせて電磁波と呼ぶが明確な境界はなく、電波の周波数が高くなってくると光の領域となり、赤外線、可視光、紫外線へと変化する。電波を用いたレーダー観測では降水や流星、電離層、高層風を、音波観測では地表近く風の風を推定する手法の原理を説明し、水蒸気分布観測など今後の展望が述べられている。光による気象観測では、ライダーの原理とその応用を述べている。

これらは、いわゆるリモートセンシング技術であり、電磁波の反射や屈折率などから、本当に見たい物理量や現象の推定を試みている。当初は軍事用として発展してきたレーダー技術が様々な観測に応用され、現在も新しい技術が開発中である。しかも章末のコラムにあるように、風を観測するためのレーダーデータに含まれるノイズを解析したところ、渡り鳥の生態が把握できた事例など、身近なところにも科学技術の可能性を感じることができる。このようにある現象を解明するために技術革新を進めた結果、全く異なる利用方法に結びつくところがこの分野の面白いところである。

第5章「GPS気象学」の場合も、もともと軍事技術として開発され、さらには測地学分野でも発

展してきたGPS(Global Positioning System)技術を用いた学問領域である。地域研究分野においてもフィールドワーク時や、データを整理する際にGPSは強力なツールであることは多くの方が認めると思うが、ところでそのメカニズムをご存じだろうか？GPSは4つの衛星情報を用いて、GPS受信機の3次元座標と時刻の4変数を計算するシステムであり、1つの受信機だと30m、複数の受信機を用いた場合は2-3mの空間的な精度が得られる。ここから多くの測位誤差要素を様々な手法で取り除いた結果、最後に残るのが水蒸気による大気遅延量という要素で、気象学にとっては重要な情報である。

すなわち「GPS気象学」とは、GPSの誤差成分の1つである大気遅延量に影響を与える水蒸気量を逆にシグナルとして取り出し、大気中の水蒸気量を推定する技術およびその応用分野である。このように、ある研究分野ではノイズとして扱われるものが、別の分野では有益な情報であるという事例は、実際には多いのではないと思われる。最近では文理問わず学問が細分化される傾向にあるが、結局見ている地球は1つなので、観測技術が発達したことで、気象学、測地学、電気工学などの複数の学問分野を架橋したともいえる。それらの学問分野は物理学を基礎とした分野であり、異分野融合とは異なると思われるかもしれない。しかし別の分野の研究者がお互い妥協することなく、技術を共有して新しい学問分野を作ったことから、理想的な異分野融合と呼ぶにふさわしい。

1990年代前半に「GPS気象学」が黎明期を迎え、1995年に日本国内で大規模な集中観測が行われた。書評者の大学入学が1996年であり、工学部の授業で観測の様子を聞かされたときに、実学に偏りがちな工学分野の技術を突き詰めることで、理学分野のような自由な研究が出来るということに興味を持ったことをよく覚えている。

第6章「宇宙からの気象観測」では、1957年に打ち上げられたスプートニク1号から、1977年の日本初の静止気象衛星GMS(通称ひまわり)、その後継機である2006年打ち上げのMTSAT-2など、一般にもおなじみの人工衛星が紹介されている。地球観測衛星に関しては、東南アジア山岳地

などの降水量データの降水メカニズム解明に多大な貢献を果たした TRMM や、2009 年打ち上げの温室効果ガス観測技術衛星 GOSAT、2012 年の水循環変動観測衛星 GCOM-W1 などが紹介されている。そもそも人工衛星に関する技術も多分に軍事技術からの転用ではあるが、気象観測用途に限定しても 1960 年に打ち上げられた米国のタイロス 1 号からすでに 50 年以上の歴史があり、しかも世界中で有効活用されていることから、最も成功した事例といえるのではないだろうか。

第 7 章「地球環境観測」では、オゾン層・紫外線、温室効果ガス、エアロゾル、直達日射量の観測を紹介しているのだが、地球規模の環境変動を理解するためには日本だけでなく、南極、山岳域などの極地での観測が重要であることにも触れている。章末のコラムでも、離島や南極越冬隊の気象観測が紹介されており、「気象庁に就職する人の三人に一人は南極越冬隊を希望しているというのもあながち誤ってはいない」など、両方の分野を知る筆者からすれば、山登りやフィールド好き、体力勝負など、地域研究者と似たり寄ったりの人達も登場する。

第 8 章「観測データの利用と研究観測」では、データの活用方法に関する概念を説明している。従来は気象観測データが最も信頼できるとされており、それを基に予報、数値予報、統計処理などの解析を行っていた。しかし実際のところは、観測機器の誤差やバイアス、観測場所の代表性の善し悪し、観測地点のばらつきなど、利用する側からみて決して均質なデータではない。そこでそれらを克服するために開発された、4 次元変分法

データ同化手法を説明している。概念を説明すると、予報値を観測値に合わせることを目的とはせずに、観測値という状況証拠をもとにシステム全体のバランスを整えて、予報精度を向上させるという手法である。この考え方は、地域研究者が聞き取り調査をしながら地域の全体像を把握する過程にも活用可能かもしれない。その他にも、計算機を用いたシミュレーションにおいて、初期値を人為的にある程度ばらつかせることで予測を行い、その結果得られる幅を持った予報値を用いて予測幅を推定するアンサンブル予報の手法や、いわゆるゲリラ豪雨の実態解明を目指した TOMACS プロジェクトなどを紹介している。

おわりに

気象観測においては、特定の地域を限定することに必然性がないために、本書においても日本や世界の事例を中心に書かれており、東南アジアに関する記述は限定的である。しかしながら東南アジアにおける気象観測は、日本人研究者が中心となって技術支援を行うなど、特に関係が深い地域である。何よりも日本の研究者および関連機関は、気象や気象災害分野において東南アジアの研究者や実務者から高い評価と尊敬を集めており、本書を読むことでその片鱗に触れることが出来るであろう。そして最新の内容が平易な文章で書かれていることから、理系の本を食わず嫌いしている研究者にこそ読んでもらいたい。

(甲山 治・京都大学東南アジア研究所)